

# 明石の君の存在意義 — 『源氏物語』の主題との関わりから —

鈴木 加緒里

## 序

『源氏物語』には、光源氏の妻の一人として、明石の君という女性が登場する。この女性は、他の女性と比べると恋愛的要素が少なく、物語展開上は目立たない存在である。しかし、天皇生母となる娘を出産するという、源氏の系譜上で重要な役割を担う。また、少女の巻以降、物語の中心舞台となる六条院と呼ばれる光源氏の邸宅があるが、この邸の一角にある冬の町を明石の君は任される。このような明石の君は、『源氏物語』において、重要な人物であり、『源氏物語』の主題に関わる存在と考えられる。そこで本稿では、『源氏物語』における明石の君の存在意義と主題との関わりについて考察したい。

## 一 明石の君の人物像

明石の君とはどのような人物設定を持たされた人物なのか。物語中での描かれ方を、表現に着目して、性質・身分・感情・光

源氏からの扱い・紫の上との関係、という五つの要素に分類を試みる。なお源氏の妻は多くいるが、姫君の養母となる紫の上との関係を見ることが出来る。以下は分類結果をまとめた表である。

2 身分	1 性質	要素	表現内容	用例数
<p>○大臣の血筋</p> <p>○親に大事にされる</p> <p>▲低い身分・田舎育ち</p> <p>▲良縁がなければ海龍王の後</p>	<p>○高い</p> <p>○上品・ものの分別あり</p> <p>▲見分不相応な気位の高さ(教養)</p> <p>▲特別に優れた顔立ちではない(性格)</p> <p>○皇女のように気高い雰囲気・優れた様子</p>		<p>(外見)</p> <p>○20</p> <p>▲3</p> <p>○18</p> <p>▲6</p> <p>○23</p>	<p>○3</p> <p>○4</p> <p>▲44</p> <p>▲4</p>

3	感情	○喜び ▲悲しみ・苦悩 ○特別な配慮	○3 ▲57
4	光源氏からの扱い	▲隠蔽 ▲紫の上を優先 ▲身分を軽んじる	○9 ▲2 5 6
5	紫の上との関係	○信頼 ▲嫉妬される	○5 ▲4

※ 表中の○は正の要素、▲は負の要素を示す。

この五つの要素を大まかに捉えたと、立場（2身分、4光源氏からの扱い・5紫の上からの扱い）と心情（3感情）の二つに分けることが出来る。そこでこの二つの側面に注目し、明石の君の人物像を考察してみる。

まず立場の面において、身分の低さが作中で多く描かれる。明石の君の身分は次のような表現がされている。

身のありさまを、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思はさじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。  
（須磨）

世にはかかる人もおはしけりと見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いとはるかにぞ思ひきこえける。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、似げなきことかな、と思ふに、ただなるよりはものあはれなり。  
（明石）

いとはしたなければ、立ちまじり、数ならぬ身のいささかの事せむに、神も見入れ数へたまふべきにもあらず（濔標）

このような身分の低さを意味する表現は、姫君を紫の上の養女にするまでは、明石の君自身の台詞や考えに主に見られ、姫君を養女にだしてからは、光源氏の台詞や考えにも見られる。この身分の低さは、後述する心情面にも大きな影響を及ぼす。

身分の低い女性として登場する明石の君であるが、後に皇后となる娘の生母でもある。この娘の出産により、光源氏からの扱いに変化が見られる。須磨に配流された光源氏が、明石の君に対して最初にとった態度が次に示す本文からわかる。

「とかく紛らはして、こと参らせよ」とのたまひて、わたりたまはむことをばあるまじう思したるを  
（明石）

光源氏は、明石の君に会いたいと思うが、自分では出向こうとせず、父である明石の入道に娘を連れてくるように命じる。このように、初め、光源氏は身分の低さから明石の君を軽んじる扱いをする。しかし、明石の君が娘を出産した後は、光源氏の明石の君の扱いが変化する。次に示す本文からは、光源氏が熱心に明石の君に上京を勧める様子がわかる。

明石には御消息絶えず、今なほ上りぬべきをばのたまへど

（松風）

この他にも、生まれた姫君のために明石の浦に乳母を遣る。さらには、乙女の巻以降、物語の中心舞台となる六条院という源氏の大邸宅の一角である冬の町を明石の君の住処として、与えるなど、特別な配慮をするようになる。

また、光源氏の愛妻である紫の上との関係も姫君の存在により変化が起こることが描かれている。次の本文からは、紫の上が、明石の君に嫉妬の感情を抱いている様子が描かれている。

「さりとも明石の列には、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北の殿をば、めざまし、と心おきたまへり。（玉鬘）

ここにある北の殿とは明石の君のことである。光源氏がかつて愛した女性の故夕顔が生きていれば、明石の君と同等に扱っただろうと紫の上に語る場面で、紫の上は明石の君に並ぶようなことはないだろうと言い、明石の君を気に入らないと思っている。この紫の上は、明石の君の生んだ姫君の養母となるが、姫君の入内後、明石の君と紫の上との関係が次のように描写されている。

対の上は、まほならねど、見えかはしたまひて、さばかりゆるしなく思したりしかど、今は宮の御徳にいと睦ましくやむごとなく思しなりになり。（若菜上）

対の上とは紫の上のことであり、いままでは、許すことのできた明石の君と、中睦まじく過ごす様子が描かれる。

これらのことから、立場の面において、明石の君は、身分が低いながら、皇后となる娘の出産により光源氏からの厚遇を受ける人物と言える。

次に心情面において、六〇例あった感情表現のうち、喜びの表現は次の三例のみである。

いみじくうれしく、思ふことかなひはつる心地して（藤裏葉）

いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、ひとつものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまうき身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まこと住吉の神もおろそかならず思ひ知らる。（藤裏葉）

明石の君は、いと面だたしく、涙ぐみて聞きゐたまへり

（若菜下）

この三例はいずれも、姫君の入内後に見られ、姫君や姫君の生んだ親王に対しての喜びである。しかし、姫君の入内後も父入道との離別などがあり、明石の君の悲しみの表現は描かれ続ける。

そして、残りの五七例が悲しみや悩みを表わすものであり、その原因の一つが、身分の違いによる光源氏との恋愛の苦悩であることが、次に示す本文から伺える。

かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんとと思し憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを

(明石)

さらに次の本文は、上京した明石の君が姫君を紫の上の養女に出す場面である。

「何か。かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひあはれなり。

(薄雲)

母親の身分の低さが、娘の出世の妨げになるとされ、姫君は紫の上の養女になる。ここでも、やはり身分の低さによって、姫君との離別が起こり、悲しみの原因となる。明石の君の悲しみは、身分の低さによる、源氏との結婚のためらいや生まれた姫君との離別がほとんどである。

このように、心情の面において、明石の君の悲しみは、身分の低さと深く関わっていると考えられる。

以上のことから、明石の君は、立場の面では、娘の出産や光源氏からの厚遇を持つ。その半面で、心情の面では、身分の低さにより悲しみを持つ人物として描かれる。

これにより、明石の君は、二面性をもった人物だと言える。この人物設定が、住まいにも表れていると考えられる。そこで、明石の君が住まわされる六条院の冬の町について、考察してみる。

## 二 六条院「冬の町」

六条院は、四町（一町Ⅱ約120メートル四方）の敷地に築かれたとされる光源氏の大邸宅である。この邸宅は、春夏秋冬の四つの町にわかれ、造営にあたって、あらかじめどの町にどの女性を住まわせるのかが決まっていたことが、次に示す本文からわかる。

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見所ありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも集え住ません御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町をこめて造らせ給。（中略）八月にぞ、六条院造りはてて渡り給。未申の町は、中宮の御古宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住み給対の御方、戌亥の町は、明石の御方とおぼしおきてさせ給へり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のをきてを改めて、さまざまに御方々の御ねがい心ばへを造らせ給へり。

（巻 少女）

作中では、春が辰巳の町、夏が丑寅の町、秋が未申の町、明石の君の住む冬の町は戌亥の町というように、その位置する方角で呼ばれることがある。この町々は、各町に住む女君たちの希望にそう趣向で造られた。これらのことから、六条院の各町には、そこに住む女君たちの特徴が反映されている。そして、四つの町は、四季を捉えているため、各々の季節感が女君の人物像とも関連していると考えられる。四つの町の特徴をまとめ

たのものが次の表である。

方角	女主人	造り
春 辰巳 (東南)	紫の上	寝殿造り。 高い山。春の花の木が無数に植えられている。池の近くの植え込みに、五葉・紅梅・桜・藤・山吹・岩躑躅を主に秋の草木が混ざっている。
夏 丑寅 (東北)	花散里	寝殿造り。 泉。呉竹が多い。大木が奥にあり、卯の花垣が作られている。花橘・撫子・薔薇・木丹を中心に春秋の草木が混ざっている。東側は馬場殿があり、埒が結ばれて、五月の遊び場所が出来ている。菖蒲が茂らせてあつて、既に名馬が飼われている。
秋 未申 (西南)	秋好中宮	寝殿造り。 紅葉が植えられた築山。きれいな音を立てるために水中に石を添えた泉。滝の奥に秋の草野がある。
冬 戌亥 (西北)	明石の君	対屋が二つ。 北側に倉が並ぶ。隔ての垣に唐竹が植えられている。雪を楽しむために松の木が多い。初霜のとまる菊の垣根。柞原、名の知られていないような山の木。

四つの町の特徴を比べると、春夏秋の三町が『源氏物語』の成立時代に平安京で見られる、貴族の邸宅様式である「寝殿造り」であるのに対して、冬の町のみ「対屋二つ」という様式をとつ

ている。さらに、冬の町には、その北側を「倉」が占めている。六条院において明石の君の住む「冬の町」だけが異色であることがわかる。そこで次にこの冬の町が置かれた方角と、冬という季節に着目して考えてみる。

冬と聞くと、一般に北を連想すると思うが、冬の町は戌亥の方角、つまり西北に位置されている。この戌亥の方角はどのような意味を持つのか。

この方角について、三谷榮一氏は、農耕信仰の観点から、「豊かさのしるし」「祝福をもたらす方角」とであると述べている(注一)。この思想が六条院にも表れていると仮定する。しかし、三谷氏の説は、日本神話について述べたもので源氏物語には特に言及していないので、源氏物語の内部からそのことを確認してみる。冬の町には、倉が多く並ぶ御蔵町があることが描かれている。倉とは、食料などのほかに、重要なものをしまっておく場所であり、その家の財産の象徴となる。また、平安時代に実在した貴族の邸宅として、東三条殿という藤原摂関家の邸宅がある。ここには御蔵町があり、その蔵の中には氏長者の地位を象徴するものがおさめられていたことが判明している(注二)。このように、家の豊かさを表わす倉が、戌亥の方角に置かれていることから、六条院において、戌亥の方角が「豊かさのしるし」や「祝福をもたらす方角」であるという思想が反映されていると考えられる。

したがって、六条院における冬の町は祝福をもたらす場所でもあると言える。明石の君の生んだ姫君は入内し、天皇生母となるが、六条院の落成が描かれた段階では、まだ姫君は幼く、

入内していない。姫君の生母である、明石の君を戌亥の方角に住まわせることで、姫君が出世し、源氏一族に祝福がもたらされるようにされたのである。

明石の君を戌亥の方角に住まわせることは、物語の設定上決定しており、そこに明石の君の特徴を表すために冬の町として考えられる。

では『源氏物語』において、『冬』はどのように描写され、読者にどのような印象を与えているのだろうか。ここでは、「少女」の巻までの『冬』の描かれ方を調べてみる。この巻で、六条院が完成し、それぞれの町の様子が細かく描写され、どの町にどの人物が住むのか初めて読者は知ることとなる。作中で六条院が落成されたときには、すでにどの季節の町に誰が住むかが決定されていたことから、「少女」の巻までに筆者が読者に抱かせたい各季節感と人物像の設定がなされていたはずである。『冬』の描写を見るにあたって、十月から十二月までを『冬』とする（『時代別 国語大辞典 上代編』より）。次の表に『冬』の景色の描写及び出来事についてまとめる。なお出来事については、姫君の養母となる紫の上が春の町に住むことから、春（一〜三月）と比較する。

冬の自然・天候		出来事	冬	春
雪	9	離別（死・生）	10（2・8）	5（4・1）
月	4	故人の追慕	7	1
風	3	光源氏と藤壺の贈答	3	0
あられ	2	仏事	3	1
氷	2	結婚	2	0
霜	2			
時雨	2			
みぞれ	2			
菊	1			
紅葉	1			
松	1			
竹	1			

表から、冬では、「雪」が降っていることが描写される場面が極めて多いことがわかる。

六条院の冬の町には、以下の工夫が施されている。

隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりに寄せたり。冬のはじめの朝霜むすぶき菊のまがき、われは顔なる柞原、おさおさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植へたり

（少女）

このことから、冬の町において、その庭のつくりは「雪」を楽しむようにされている。以上から、冬の場面に描写される自然は「雪」が多く、六条院の冬の町にもそれは十分に反映されていると見る事が出来る。

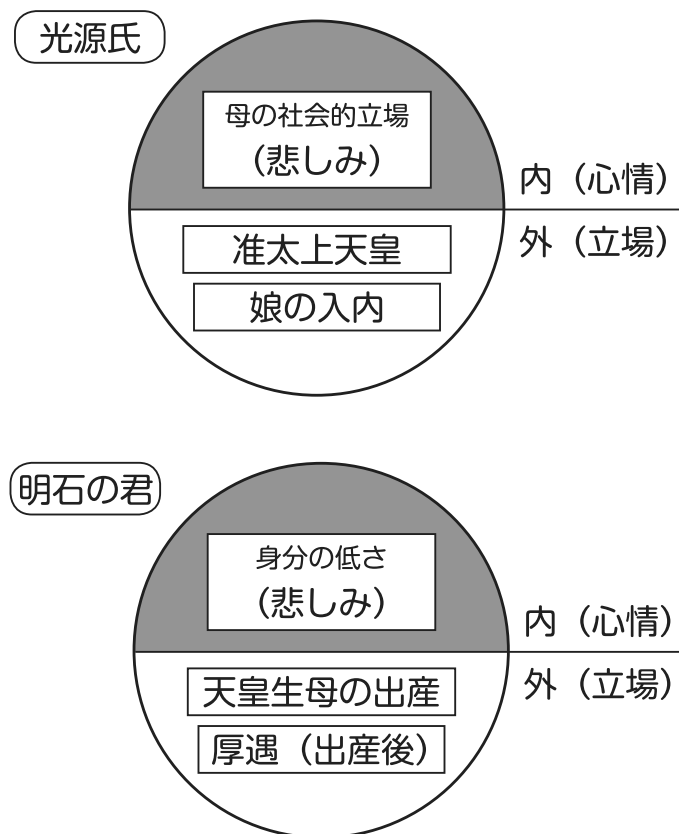
冬に起こった出来事については、「離別」と「故人の追慕」が多く見られ、両者は春にも見られたが、冬のほうが上回っていることから、源氏物語における冬の特徴と言える。特に、離別については、一章でも取り上げた、明石の君と娘の離別も冬に描かれている。この二つの要素は、悲しみを連想させるものであり、一章で述べた明石の君の人物像と関連していると言える。

以上から、冬の町は、豊かさのしるしや祝福をもたらす方角を表わす半面で、悲しみを内包しているという、二面性を持ち合わせ、明石の君の人物設定と対応している。さらに、このような二面性をもつ明石の君の人物設定は、光源氏の人物設定とも対応しているようである。

### 三 明石の君の存在意義

光源氏は天皇の第二皇子として、物語の冒頭で誕生する。しかし、母である桐壺の更衣はねたみを受けて、社会的に排除される存在とされる。そのため、光源氏は、母亡き後に臣籍降下させられる。これによって、物語の冒頭から、光源氏は本人にはどうすることもできない出生による悲しみを持ち、準太上天皇となり栄華を極めたとされるのちも、愛妻である紫の上の死などによって、悲しみを内包し続けることとなる。

この人物設定は、先に述べた明石の君の人物設定と類似しており、光源氏の持つ悲しみを、明石の君が女性の立場から表しているかのような構造となっている。



このように考えてみると、明石の君の存在意義とは、主人公光源氏の出生に関わる悲しみを女性の立場から表わすことにあったのではないか。源氏物語に登場する他の女性も悲しみを抱えているが、親の身分という、自分ではどうすることもできない出生の悲しみをもち明石の君は、主人公の光源氏に類似した人物設定をもつ点で、主題に深く関わる重要な存在だと言えるだろう。

## 結

『源氏物語』の主題は、悲しみをもったものの栄華を述べることにあったのだろう。そのように考えると、明石の君は、光源氏の悲しみを女性の立場から表わしているという点で物語の主題と深く関わる重要な存在であつたと言えよう。

注一『日本神話の基盤』三谷榮一著

(昭和四十九年六月十日 塙書房発行)

注二『東京海上創業一〇〇周年記念出版 蔵 暮らしを守る』

文芸春秋事業出版コーナー

(昭和五十四年十二月一日 東京海上火災保険株式会社)

なお本文の引用及び、用例の抽出はすべて、『日本古典文学全集』(小学館)に依った。

(平成二十一年度国語専修卒業)